



著者について

森有正（もり・ありまさ）

一九一一年東京に生まれる。東京大学文学部  
仏文学科卒業。東京大学助教授をへて、現在  
パリ在住。六八年芸術選奨受賞。

主著―『流れのほとりにて』（弘文堂）『城門の  
かたわらにて』（河出書房）『遙かなノートル  
ダム』（筑摩書房）ほか。

訳書―パスカル『田舎の友への手紙』ほか。

## 言葉事物 経験

一九六八年三月二五月初版

一九六八年五月二五日二刷

著者森有正

発行者中村勝哉

発行者株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―四

電話東京二五三局二〇九三

振替東京六二七九九

印刷堀内印刷所

製本橋本製本所

ブックデザイン平野甲賀

◎一九六八年八検印廃止▽落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価四八〇円

曾葉事物經驗

森有正對話集

晶文選書





彼を見、われを思う

堀田善衛 森有正

7

技術時代と思想

武田泰淳 森有正

49

今こそ内面世界へ

大江健三郎 森有正

75

日本語

木下順二 森有正

101

パスカルの世界

前田陽一 森有正

137

編者あとがき

153



言葉  
事物  
経験





彼を見、  
われを思う

堀田善衛  
森 有正



堀田 お久しぶりです。森さんが日本に帰られたのは何年ぶりになりますか。

森 十一年目になります。正確にいうと十七年目になります。というのは、十一年前に帰ってきたときは、ちょっと精神の状態が異常でしてね、本当の意味では帰ったということにはならないんです。もう一つはヨーロッパの印象がまだ強すぎて日本の状態が客観的に頭に入らなかった。

堀田 森さんが最初に出かけたのは？

森 一九五〇年。一九五五年に三カ月間帰国。それからこんど。

堀田 五年というと？

森 仏印のジュネーブ協定が五四年七月にでき、翌年二月までマンデス・フランス内閣がつづき、それがひっくり返ったあとですよ。

堀田 フランスがはげしく動いていたころですね。

森 そう、ちょうどアルジェリア問題の始まった時ですね。そんな大戦後の諸問題がうずまいているヨーロッパへ私ははじめて行っていいでしょう。一九五〇年から最初の五年間は精力的にヨーロッパの各地を旅行して、アフリカの北端まで行きました。そのためにヨーロッパの印象というのが非常に強い。だから、一九五五年に日本に帰っても、すぐヨーロッパと比較したり、ヨーロッパを思い出し、りして、どうも日本のことが着実に入らないままにまた出発してしまっただけです。

こんどはヨーロッパの私の中で沈着するものは、一応沈着してしまつたあとでしよう。だから、非常に日本のものが客観的に入ってくるようになりましたね。もっともこれは感じからいのですが。

堀田　そこがむずかしいところですね。

森　むずかしいところです。とにかくこんど帰つて来る前には、日本というものについて、ことにオリンピック後の日本、そのなかでも東京というものが、復興し、どれだけ変化したかということを感じんさん聞かされてきたでしょう。しかし、日本に着いてみると、ほとんど前と変わってないですね。東京の町も高速道路ができたり、生活が豊かになっていたりはしていますが、町全体の相貌とか、そこから発散する一種の感覚、色彩とか音響とかそれから住民の反応とか、そういうものはむかしの日本とまったく同じだという感じです。

堀田　森さんは東京生まれの東京育ち？

森　東京、しかも新宿生まれ。その意味で、私の生まれながら持っていた東京の感覚というものが、ほとんどそのままここにあったという感じなんです。それに、高速道路ができたって、それがどこに行くかという、先をたどって行けばまたむかしの街道に出ちゃう（笑）。新幹線といったって大体東海道に沿っているってわけだしね。つまり、どんなに便利になっても、東京とか日本の可能性のなかにふくまれているものばかりです。なにも本質的に新しいものはないわけでしょう。結局、むかしからあるものが、文明の進歩につれてスピードが早くなったり便利になったりというだけで、そういうものの採り入れ方もおなじ、そこに従事している人たちの新しいものを使っている態度もほとんどむかしと同じで、むかしもそういう便利なものがあったら東京の人は、いまとおなじようにしただろ

うと思いますね。

ことに街をぶらぶら歩いても感じがまったくおなじで、それは、おそらく三十年前とちがわないのではないかと思う。東京にたえず住んでいると、目の前の変化が非常に大きく見えますけれども、遠くから東京の大まかなイメージだけをもっていてひょっと来ると、ほとんど同じなんです。これには私自身びっくりしてしまっただけです。

堀田 大きく見てそれが正しいでしょう。けれどもやはりこれは困ったぞというところもあります。ぼくは北国生まれの金沢育ち、東京遊学ですけれど、東京にいた間に下宿を十七、八べん変わったんです。いろいろな場所に住めるだけ住んでみようという考えがあって、学生時代に積極的に転居してみたんですが、現在、建物そのままに残っているのは三カ所だけです。そのほかのアパート、下宿屋、しろうと下宿、それらは全然ありませんね。

森 記憶に残っていませんか。

堀田 記憶ではなくて、現実がない。そういうものの再確認の上に、文学とかいうものがあると思うんですがね。歴史にしても、個人にとっては経験の再確認という要素があると思うんですが、それが出来ないんでさびしい気がしますね。

森 再確認の相手が消えてしまう。しかし、おなじ東京です。私は一軒一軒の家は再確認できなくても、「東京というもの」は確実に再確認します。

堀田 ぼくの知人で突如として学問の対象がなくなった人がいます。上海の租界を研究していた人です。そういう妙テクレナなことも現代起こりますね。それと似た意味で、下宿が三軒しか残っていない

いというのは自分の立っているところをすぐわれたような感じで、なかには地形もなくなったところもあります。

森 もちろんそういう意味では変化はあります。私の生まれた家や引越した家もだいたい焼けてしまった。ただその場合、あとに建った家が、やはり東京の人が建てた家という印象です。そこで、いま申したように、若干抽象的ですが、再確認するんです。

堀田 まあ、日本の場合、ある程度旧家に育った人間は二、三百年のうちには火事に二、三度ぐらいあっている。だからそういうことに対して決定的にさびしくなり絶望するということは、日本人、日本文化の場合、ないとは思いますがね。

森 それはたとえばタタミ敷きの部屋に行くときややっぱり日本の部屋だという感じでむかしを思い出すわけですよ。というのはあまり日本と違うところにいたものだから、日本のものだと一応全部、自分に関連のある日本のものと再確認してしまう。もう一つは、現在、丸の内を中心にして大きなビルがふえたでしょう。あれが実に、ヨーロッパのビルと違う、まさに日本のビルだという感じですね。むかしからある丸ビルや海上ビルと同系統で同じような灰色をしていて、だいたいにおいて日本人が使っているコンクリート建築の色ですね。ヨーロッパではそういうビルは全然ないですからね。

堀田 日本の団地ですが、あれは同潤会アパートの系統ですね。それがパリ郊外のアパート群と全然性格が違うものですね。

森 それから、この間、横須賀線で湘南の方に行ったんですが、その途中にいっぱい団地みたいなものがあるでしょう。そのほとんどが、窓がかくれるほど洗濯物を出している。あれはむかしからの、

つまらない些事ですが、ああいう感覚の集合というのは、実にむかしの日本だという感じですね。

堀田 よく窓に洗濯物やふとんを干しちゃいかんという人がいますけれど、あれは見えて楽しいな。

森 日本の湿気の状態で干しちゃいかんといったら、だめですよ。(笑) それからおのおのの家庭が全部洗濯屋に出したら、いまの洗濯屋だけじゃ洗濯できない。たとえ金を払うことが出来ても、洗濯屋が五、六倍ふえなきや。

堀田 ヨーロッパのアパート住いの人が、外に出てカフェでしゃべったりお茶を飲んだりしているのと共通するかしなかわからないけれど、日本の生活が窓の外にはみ出していくかたちにはちょっと別格のおもしろさがありますね。

森 カフェに行くのとは全然性格の違うものです。自分のところは自分のところという事でね。ヨーロッパでは自分の住居に人を入れないためにカフェに行くのが多いですからね。日本はそうじゃなくて、窓や入口から大きく外へ出ていますね。庭なんかさうでしょう。

堀田 パリのアパートでは、お客をしないことが条件になっているところがありますね。

森 だから、カフェやレストランは、そういう意味で日常生活の一部にとり入れているという面がある。組織された生活の一部になっている観がある。その生活体系のなかで、私生活は嚴重に閉ざされ、まもられている。

私が言いたいことは、日本の変化が日本の内からとられている場合と、外部から見た場合と、その変化ということの意味にかなり差があるんじゃないかということですよ。日本の内部では非常に変わったと思われていても、外部からそれを見るとそれほどでもなく、非常に重要なところではほとんど

変わっていないんじゃないか。これはイデオロギーというようなものだけでなしに、一般的なもの  
考え方とか、感じ方とか、そういう面でやはり同じ面が圧倒的に強いんじゃないかという気がするん  
ですがね。

堀田 日本に来るフランス人やアメリカ人は、アメリカナイゼーションということが非常に気になる  
ようだな。そういう人々にいつでもぼくは、「それは表面的なことで心配無用だ」といっている。「そ  
れじゃやっぱり大和魂か」というのもいましたけどね。

森 日本はやっぱり日本で、そんなにひどく変わるもんじゃない。たとえば世代論というのがあるで  
しょう。世代の変化につれ考え方も変わり、おやじと息子がけんかしたり、先生と生徒の思想が合わ  
なくなるという。しかし、むかしの生徒や友人、現在の大学生なんかと会って話してもそんなに大き  
な変化はない。日本の学生の反応の仕方はほとんど同じですね。ヨーロッパの学生と比べると大き  
りする。私どもの学生のときの反応と同じだ。その内容は違っても反応の起こし方、質問の仕方は非  
常に似ていますね。

堀田 内容も、用語が違うだけで、運び方はそう変わってはいないでしょう。

森 イデーとか使うことばが違っていますが、それを処理し、それに対する態度は非常に似てますね。  
それから、むこうにいと日本はインドや中国のむこう側の、太平洋の島の上にある国だ、という印  
象がとても強くなってくるんです。東京に住んでいたときは、そういう印象はほとんどなく、日本自  
体大陸みたいなもので、そのむこうにシナ大陸があるという感じだった。そういう意味で大きな全体  
の比重からいう日本の像が、むこうで徹底的に変わってしまったんですよ。その日本が、中国、イン



ドに対して、非常につよくヨーロッパやアメリカと結んでいる。そのためにアメリカとヨーロッパの影響が日本に圧倒的に強くて、アメリカとヨーロッパが戦後安定してくるにつれて、日本もそれとおなじように安定してきた。そこで、中国やインドネシア、ヴェトナム、インドなどで沸騰している問題に対してはある意味で別個で無関係になっちゃったという感じがむこうで非常にしましたね。沸騰しているアジア諸国との間に一種の不均衡というか、不調和というか、落ちつきのわるい状態を起こして、それがいまの日本の根本的な問題を構成しているんじゃないか、ということをもむこうで感じていました。ただ日本に来てみると内部的にはわりあい安定しているんですね。つまり、こういう大きい不均衡が比較的実感されていない。しかしこれはじつに危険きわまりないことだと思っております。

堀田 たたとえば日本の政治の領域における右と左ですが、それは無意識的な分業関係にあると思うんです。右と左、つまり自民党と社会党あるいは共産党は外交政策が正反対であることによって、それによってナショナルなユニティを作っている。どうもそれで国がもっていつていると感じますね。

森 そうですね。自民党はアメリカと安保条約を結び、社会党は中共と共同声明を出したりしている。結果としては分業らしいことになりませぬ。しかし……。

堀田 かしこいというかずるがしこいというか、分業を意識して分担しているわけではない。これは他の国からみればずるがしこいかもしれないが、ナショナルな観点に立てば、ほくはあのぐあいの悪かった時期には仕方なしの、つごうのよいやり方だったと思えますね。

森 フランスにも表面的には若干似たことがありますよ。フランス共産党はソ連一辺倒ですが、しかしそれに反対している中央に寄った左翼から、右翼に延びている政党のつくっている政府は共産党を